

# 心身の状況を表す擬態語動詞についての素性分析

吉 永 尚

## 1. はじめに

心身の状況を表す擬態語には、「いらいらする」や「ぺこぺこだ」のように「する」や「だ」をつけ派生的な動詞や形容動詞（ナ形容詞）のように用いられるものや、「ぐっすり眠る」のように原型のまま用いられ後続動詞を副詞的に修飾するものなど、形態的性質が異なるものが混在しており、機能的な性質に関する研究は未だ少数である。

本稿では、心身の状況を表す擬態語を「擬態語+する」の形をとるもの、「擬態語+だ」の形をとるもの、擬態語のみで用いられるものに分類し、それぞれの語彙グループの特性について考察し、「擬態語+する」の形をとるもの（以降、擬態語動詞と呼ぶ）に焦点を当て、アスペクト性などの文法的性質について素性分析を試みる。擬態語動詞の形態的特徴と意味の関わりについても観察し、最後に語彙概念構造を用いて意味構造を分析する。

## 2. 心身の状況を表す擬態語の統語的分類

### 2.1 統語的性質による四分類

心身の状況を表す擬態語を、統語的な相違から四タイプに分類する。

本研究で扱う擬態語は、感情的なもの、痛覚や触覚など体感的なものとし、味覚や食感を表す「ぷりぷり」「しこしこ」「さくさく」なども除外する。また「ぐうぐう（眠る）」「ごくごく（飲む）」「こんこん（咳をする）」など、音声的な要素を含むものも擬音語的と見なし、除外する<sup>1)</sup>。〈Aタイプ〉・・・主に「する」が付加され擬態語動詞として用いられる。「だ」は付加できない。

いらいらする、はらはらする、わくわくする、かつとする、はつとする、ほつとする、ポーッと  
する、むつとする、すつとする、ぞつとする、すつきりする、うっかりする、がっかりする、ぐ  
ったりする、うんざりする、どきどきする、ずきずきする、きりきりする、がんがんする、じん  
じんする、ちかちかする、ちくちくする、ちくつとする、ひりひりする、むかむかする、むずむ  
ずする、ぞくぞくする、くらくらする、うとうとする、ごろごろする、など。

〈Bタイプ〉・・・主に「だ」が付加され形容動詞（ナ形容詞）的に用いられる<sup>2)</sup>。状態の変化を表す場合は、「くたくたになる」のように「だ」は「に」（「だ」の連用形）に変化する。「する」

は付加できない。

くたくただ、からからだ、ぺこぺこだ、ふにやふにやだ、ぐにやぐにやだ、など。

〈Cタイプ〉・・・「する」と「だ」が両方付加できるもの（「すべすべした類」「すべすべの類」のように、名詞を修飾する場合は、「する」が「した」の形で用いられ、「の」が付加される事もある）

ふらふら（だ／する）、ぐらぐら（だ／する）、ざらざら（だ／する）、つるつる（だ／する）、ぬるぬる（だ／する）、ねとねと（だ／する）、べとべと（だ／する）、べたべた（だ／する）、すべすべ（だ／する）、ふわふわ（だ／する）、など。

〈Dタイプ〉・・・特定の動詞と結びつき、副詞的に用いられるもの。「する」や「だ」が付加できないもの。

ぐっすり（眠る）、すやすや（眠る）、ぶるぶる（震える）、わなわな（震える）、など。

A、Cタイプには、「する」が付加されずに原型のまま特定の動詞や形容詞と結びつき、Dタイプの擬態語の様に副詞的用法として用いられるものがある。

例えば、Aタイプの「ずきずき」「きりきり」「がんがん」「ちくちく」「ひりひり」は「痛む」「痛い」と結びつき「ずきずき痛む（痛い）」「きりきり痛む（痛い）」の様に副詞的用法となる。

同様にCタイプでも、「ふらふら」「ぐらぐら」は「ふらふら揺れる」「ぐらぐら揺れる」の様に、「つるつる」「べたべた」は「つるつる滑る」「べたべたくっ付く」の様に特定の動詞と結びつき副詞的に用いられる。しかし、これらの語は「する」の付加により擬態語動詞としての機能を持つので、Dタイプの様に常に原型のまま副詞的に用いられ、「する」や「だ」が付加されないものとは区別される。

また、擬態語には意味用法が多岐にわたるものがある。Aタイプの「ごろごろする」は、怠ける様子、「目がごろごろする」では、目に異物があり不快な様子を意味するが、Dタイプとして副詞的に用いられると、「ごろごろ転がる」「雷がごろごろ鳴る」の様に用いられる。本稿では、Aタイプの「ごろごろする」のように行動や感覚を表すもの、つまり人間の心身の状況を表すものに限定して、取り扱う事とする。

## 2.2 品詞性についての考察

A、B、C、D4タイプの品詞性について考えると、Dタイプは原型で用いられ特定の動作の状況説明に特化しており、動作副詞、状態副詞に近い語であると判断される。

A、B、Cタイプについては、「する」や「だ」が付加された形で、それぞれ動詞、ナ形容詞になるという性質から、いずれも動詞性や形容詞性を持った名詞に近い語であると考えられる。

「本」「人形」「時計」など動作性を持たない名詞は、「する」を付加して「本する」の様には言えないが、「研究」「質問」などの動作を内包する名詞は、「研究する」「質問する」の様に、「スル動詞」を形成する。したがって、Aタイプの擬態語は何らかの動詞性を意味内容に含むと考えられるが、この点については後で詳しく述べる。

同様に、「本」「人形」「時計」など形容詞性を持たない名詞に「だ」を付加し「本だ」の形にすると、その意味内容には呼び名を示すだけで性質状態を説明する働きはないが、「聡明」「正常」などの形容詞性を内包する名詞は、「聡明だ」「正常だ」の様にナ形容詞を形成する。したがって、Bタイプの擬態語は形容詞性を意味内容に含むと考えられ、Cタイプは両方の形態をとる事から動詞性、形容詞性をともに内包すると考えられる。

また、擬態語の中には機能的に多様化しているものもあり、Aタイプの「ずきずきする」、Cタイプの「ぐらぐらだ／する」などでは「ずきずき痛む（痛い）」「ぐらぐら揺れる」のように「する」や「だ」が付加されずDタイプのように副詞として用いられる<sup>3)</sup>。

影山（2005）では、擬態語動詞について「する」は意味構造の鋳型を、擬態語は具体的な意味内容をそれぞれ分担して受け持っており、「擬態語＋する」全体の意味構造は「する」が持つ意味構造の鋳型に擬態語が表す特定の意味内容を組み込む事で得られ、その結果「擬態語＋する」全体の意味構造は通常の動詞の意味構造と実質的に同じになると述べている。（影山（2005）pp.1-2）

また、田守（1993）では、動詞組み入れ可能なオノマトペ（本稿では擬態語）の特徴について、人間の心理・感覚を記述する「擬情語」は例外なく動詞組み入れが可能と述べ、物事の性質状態を表すものとの相違を示唆し、また、形態的特徴について言及している。（田守（1993）pp.45-47）

本稿では、擬態語の元々の意味性質によって「する」や「だ」などの統語成分が選択的に付加され、「する」が付加されると動詞、「だ」が付加された場合はナ形容詞として機能すると考え、語彙本来の意味と「する」や「だ」の述語機能が統合されて新たな擬態語述語を形成すると結論付けたい。

以下、Aタイプ、Bタイプの擬態語述語と名詞派生述語の類似を示す例文を挙げる。Cタイプは動詞、形容詞の両方を形成し、A、Bタイプ両方の性質を併せ持つので省略する。Dタイプについても、擬態語単独で副詞として用いられ述語に派生しないので考察外とする。

(1) 彼は熱心に [勉強・練習] する。（勉強・練習→「する」の付加で動詞を形成）

(2) 朝から頭が [ずきずき・がらがん] する。（Aタイプ、動詞を形成）

(3) 彼は [有能・温厚] だ。（有能・温厚→「だ」の付加でナ形容詞を形成）

(4) 彼は [くたくた] だ。（お腹が [ぺこぺこ] だ。）（Bタイプ、ナ形容詞を形成）

(5) 彼は [有能・温厚] になった。（有能に・温厚に→ナ形容詞を形成し連用形に活用）

(6) のどが [からから] になった。（お腹が [ぺこぺこ] になった。）（Bタイプ、連用形に活用）

(1) (2) はどちらも動詞の類似点が見られ、(3) (4)、(5) (6) もそれぞれナ形容詞という類似点が見られる。

また、A、Bタイプには名詞性という機能的共通点はあるが、動詞を形成するAタイプと形容詞を形成するBタイプとでは、意味内容の相違が観察される。

前述の様に、「スル動詞」を形成する名詞は「運動」「到着」などのように、動作や変化の意味を内包する事が条件である。A タイプの「ずきずき」「ぞっと」は何らかの動詞性があるので、「する」が付加され、B タイプの「ふにゃふにゃ」「ぺこぺこ」は動詞性がないので付加されないと考えられる。

A タイプの擬態語は、可視的な動作・変化は意味しないが、「昨夜から」や「数時間前から」のような期間、あるいは「～の瞬間」の様な、特定の時間を表す時間修飾語と共起する性質がある。

一般的に、期間や瞬間を表す時間修飾語との共起は、動詞的性質に見られる特徴であり、この点で A タイプは動詞性があると言える。これらの時間修飾語は、形容詞的な B タイプとは折り合いが悪い。

(7) 昨夜からずっと奥歯がずきずきする。

(8) 寒い屋外に出た瞬間、ぞっとした。

(9) ?昨夜からずっとボールがふにゃふにゃだ。( ? は文法性判断が中間的な事を示す)

(10) \*寒い屋外に出た瞬間、お腹がぺこぺこだ<sup>4)</sup>。( \* は許容されない事を示す)

また B タイプの「ふにゃふにゃ」「ぺこぺこ」は、「だ」を付加しナ形容詞に類似した語を形成するが、A タイプの「ずきずき」「ぞっと」には「\*ずきずきだ」「\*ぞっとだ」の様に、「だ」が付加できない。形容詞の本質は性質・状態を表すことにあり、「ふにゃふにゃ」「ぺこぺこ」の様な物事の様態を説明する擬態語は「だ」の付加によりナ形容詞に派生するが、継続や瞬間などの時間的性質を持ち、静止的な状態性の弱い「ずきずき」「ぞっと」はナ形容詞に派生しない。

従って、A タイプの「ずきずき」「ぞっと」と B タイプの「ふにゃふにゃ」「ぺこぺこ」は時間的性質や状態性などの点で、語彙の元々の意味性質が異なっていると考えられる。

C タイプは「する」と「だ」が共に付加され、動詞的、形容詞的な性質をともに持つ語であると考えられ、D タイプは副詞的な用法に特化し述語派生機能を持たない語であると考えられる。

### 3. 擬態語動詞の素性分析

#### 3.1 擬態語動詞の文法的特徴について

前節で述べたように、A タイプだけには時間的性質が見られ、他の擬態語の状態性を逸脱した動詞性が観察されたが、従来、心身の状況を表す動詞は「いる」「ある」のような状態動詞の一種としての見方が強い。国立国語研究所（1985）では、感情や感覚を表す動詞は変化や始発の局面のあとに続く局面が話し手の内部の心的状況であるので、局面の境目が不明確で基準時間との関係がわからなくなり、アスペクトから解放されると述べている。

本節では、時間的性質を中心に擬態語動詞についてさらに詳しく考察し、アスペクト性がみられるものがあることを提唱する。また、状況説明の擬態語は状態的語彙とされているが、動詞性

を持つものもあることを提唱したい。

前述のように、擬態語動詞は擬態語本来の意味に時間性（動詞性）を持ち、「する」が付加されることで文法的に動詞として機能すると考えられるが、動詞が持つ時間的性質として、継続や瞬間を表すアスペクト性について調べる。状態動詞を除く一般動詞には継続性、瞬間性が見られる。アスペクト形式「ている」で継続性、瞬間性を観察し、期間や瞬間を表す時間修飾語との共起を観察し、それぞれの語が持つアスペクト性について考える。

まず、「している」の形で継続性、瞬間性を見る<sup>5)</sup>。

[[「している形」への変換－進行解釈のもの]

- (11) いらいら（はらはら、わくわく、ポーッと、ぐったり、どきどき、ずきずき、きりきり、がんがん、じんじん、ちかちか、ちくちく、ひりひり、むかむか、むずむず、ぞくぞく、くらくら、うとうと、ごろごろ）している。

概ね心理状態の継続や感覚の体感継続を表し、一定の期間その状況が継続している事を示し、状況が進行中であると解釈される。

[[「している形」への変換－結果解釈のもの]

- (12) がっかり（ほっと、むっと、がっくり、うんざり）している。

これらの語は心理状態や感覚の一定時間の継続を示さず、瞬間的な心理変化が起こり、その変化が残存していると解釈される。

[[「している形」への変換ができないもの]

- (13) \*かっつと（はっと、すつと、ぞつと、すつきり、うっかり、ちくつと）している。

これらは「する、している」のアスペクト対立がなく、状態動詞の様に、ル形が現在の状態を表している。結果解釈のもの「している形」への変換ができないものの多くは、促音「っ」を含み語末が「と」や「り」である点で形態的に似通っている。

浜野（2014）ではオノマトペの形態的特徴と意味の関連について詳しい記述があるが、促音を含むオノマトペの持つ変化性、瞬間性については促音の語感との関連が示唆されている。（浜野（2014）p.46）

次に、期間や瞬間を表す時間修飾語との共起を見る。

[期間を表す時間修飾語]

文末を「している形」にして観察する。

- (14) 彼は朝からずっといらいら（ポーッと、ぐったり、うとうと、ごろごろ）している。

- (15) 発表の間中、はらはら（わくわく、どきどき）して見ている。

- (16) 昨夜からずっと、頭がずきずき（がんがん、くらくら）している。

- (17) 昨夜からずっと、胃がきりきり（がんがん、じんじん、ちくちく、むかむか）している。

- (18) 昨夜からずっと、背中がぞくぞく（ひりひり、むずむず）している。

(12) (13) で挙げた、瞬間的な意味が強いもの、「ている形」への変換ができないものを除き、

概ね期間副詞と共起する。次に、瞬間を表す時間修飾語との共起を見る。

[瞬間を表す時間修飾語]

継続の意味を含まないので、文末は「する」「した」の形で観察する。

(19) 顔を見た瞬間、ぞっと（ほっと、はっと、むっと、がっかり）した。

(20) 針が刺さった瞬間、ちくっとした。

(21) 胃薬を飲んだ途端、すっと（すっきり）した。

(12) で挙げた「がっかり」「ほっと」「むっと」(13) の「はっと」「すっと」「ぞっと」「すっきり」「うっかり」「ちくっと」など、瞬間的な意味が強いものや「している形」への変換ができないものが共起し、アスペクト性において、(11) で挙げた「いらいら」「はらはら」「わくわく」「ポーッと」など「している形」で進行解釈になるものとは性質が異なっている。

また、擬態語動詞は心理動詞と同様、「し終わる」の様な完了の表現ができない。

[完了性-「し終わる」との共起]

(22) \*いらいら（はらはら、わくわく、かっと、はっと、ほっと）し終わる。

ほぼすべて、完了の表現と共起しない。感情的、感覚的な状況を意味する語に完了性はそぐわないためであると思われる。

次に、動詞主語の意味役割の手がかりとなる意志性を、意向形「しよう」によって観察する。

[意志性-「しよう」との共起]

(23) \*今日はいらいら（はらはら、わくわく、かっと、はっと、ほっと）しよう。

ほぼすべて意志性がないが、次の例のように一部意志性が見られるものも少数ある。

(24) 今日は一日ごろごろ（ポーッと）しよう。

怠惰な時間を過ごし何もしないという意味内容にわずかの動作性が含まれているからであろう。意志性や自主的な動作性がほぼ見られないので擬態語動詞の主語は Agent（動作主主語）ではなく殆どすべて Experiencer（経験者主語）であると判断する。アスペクト性が見られるものになり存在することが観察された。

### 3.2 アスペクト性と形態的特徴の関与について

(11) で挙げた「いらいら」「はらはら」「わくわく」、(12) で挙げた「がっかり」「ほっと」「むっと」「がっかり」(13) の「はっと」「すっと」「ぞっと」「すっきり」「うっかり」「ちくっと」などを見ると、アスペクト性と形態の関連が推察される。「いらいら」むかむか」「うとうと」など、同じ音形が繰り返される「●○●○」型に、「する」がついたものは、「している形」で進行解釈される場合が多い。量語で状態の反復継続を含意し、持続性を表現するからと考えられるが直感的判断であり、詳細なデータ分析によって検証することが必要である。

反対に、促音を含む「○っと」「○っ○り」型に「する」がついた形態を持つものは、(12) (13) の様に結果解釈されるものや「している形」を持たないものが多い。前述のように促音の語感と瞬間的な変化の関与の可能性が考えられるが、これについても検証が必要である。

「むかむか」は継続性があるが、「むかっと」は瞬間的な意味が強い。

また「ころころ」「ろごろ」など、清濁音の対比によっても事態の程度・性質を表し分けられていると思われ、擬態語動詞には形態的、音声的要素と意味の関与があると推測される。どのような形態をとる時、継続性や瞬間性の意味性質を持つのかという問題については今後の課題としたい。

### 3.3 擬態語動詞の語彙概念構造での考察

以上の観察をもとに、擬態語動詞のアスペクト性や意志性について分析した結果、次のように語彙概念構造で表す事ができると思われる。

(11) 〈継続性を持つもの〉

[x EXPERIENCE], (+CONTINUOUS)

(ACT) (「ろごろする」など)

(12) (13) 〈継続性を持たないもの〉

[x EXPERIENCE], (-CONTINUOUS)

これらの擬態語動詞はいずれも意志性や他動性がなく、感情や感覚を表す自動詞であることがわかる。しかし、従来の研究では、これらの擬態語動詞は一般の動詞とは区別して扱うことが多く、統語的に体系化されることが少なかった<sup>6)</sup>。

非能格性（自動詞性）に焦点をあてて観察すると、継続性や瞬間性など、外的動作動詞や心理活動動詞との共通点、動詞性を見出すことができ、形容詞性あるいは副詞性が強い B、C、D タイプとは異なっている事がわかる。

## 4. まとめと今後の課題

心身の状況を表す擬態語を動詞性、形容詞性を手掛かりに4種に分類し、動詞性の強い A タイプを擬態語動詞として取り上げ、素性分析を行った。

擬態語動詞のアスペクト性について調べた結果、形態的・音声的な特徴が、継続性・瞬間性と関与している事が推察される。従来の研究では、擬態語動詞は形容詞的な状態性の強い語として位置付けられてきたが、非能格性に焦点をあてて観察すると、継続性や瞬間性など外的動作動詞や心理活動動詞に見られる動詞性を見出すことができる。形態とアスペクト性など意味の関与については、詳細な調査研究が必要である。今後の課題としたい。

日本語教育の分野では、擬態語の教育に関する研究は非常に遅れており、使用頻度の高い擬態語についての効率的な教育の必要性が注目されている。擬態語の形態によって意味や機能を推し量り品詞的な分析ができるようになる事は、外国人の日本語学習において大きな手掛かりとなる。

浜野（2014）では、オノマトペから派生する「擬態語動詞」は生産的であるが深く理解されて

いない領域であるとし、日本語教科書やオノマトペ辞書では「擬態語動詞」と擬態語副詞を明確に区別していないが、統語的に全く異なる語なのではっきり区別して教える必要がある事を提唱している。(浜野(2014) pp.110-112) 擬態語の意味・用法、形態との関与について更に詳細に調べ、得られた知見を効率的な教育に反映する事を目標に研究を続けたいと思う。

本稿は学内共同研究「医療福祉分野への貢献を目的とするオノマトペの習得研究」学術研究助成基金基盤研究(C)「心身の状態を表すオノマトペの習得研究」の一環として書かれた。

#### 注

- 1) これらの他に擬音語とみなされるものに、「ががあがあ(麩をかく)、ごしごし(洗う)、ごほごほ(咳をする)、ゼーゼー(いう)」などがある。
- 2) ナ形容詞は名詞に前置される際、「きれいな花」の様にナに活用するが、擬態語の場合は「\*カラカラな喉」の様に許容されない点で相違があり、類似点はあるが全同ではない。
- 3) 擬態語には名詞としての用法もある。例えば、Aタイプの「いらいら」、Cタイプの「ぬるぬる」などは「渋滞でいらいらが募る」「薬剤でパイプのぬるぬるを落とす」のように文中で「ガ」格や「ヲ」格となり、名詞として機能している。この働きは擬態語が持つ名詞性の現れであると推測される。
- 4) 「寒い屋外に出た瞬間、お腹がぺこぺこになった。」の様に「連用形+なる」の形にすると文法性が上がるが、これは変化動詞「なる」の持つ事態変化の意味によって「瞬間」と共起できるようになったと考えられる。
- 5) 「ている」形でのアスペクト解釈については、金田一(1950)に倣い、進行解釈は継続動詞(第二種)、結果解釈は瞬間動詞(第三種)と見なす。また、「する」と「だ」が両方付加されるCタイプは金田一(1950)による分類の第四種(状態的なもの)に相当すると思われ、「ざらざらする/している、つるつるする/している、べとべとする/している」の様に「する、している」の意味の差が少ない。このタイプは形容詞的性質が強く、アスペクト対立が弱い。
- 6) 国立国語研究所、金田一では擬態語動詞はほとんどが状態性の強い第四種と見なす記述がある。

#### 参考文献

- 影山太郎(2005)「擬態語動詞の語彙概念構造」第2回中日理論言語研究会発表要旨。  
金田一春彦(1950)「国語動詞の一分類」『日本語動詞アスペクト』むぎ書房。  
国立国語研究所(1985)『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』秀英出版。  
田守育啓(1993)『オノマトピア擬音・擬態語の楽園』くろしお出版。  
浜野祥子(2014)『日本語のオノマトペ』くろしお出版。  
吉永尚(2008)『心理動詞と動作動詞のインターフェイス』和泉書院。

---

[よしなが なお 日本語教育・日本語学]